基本CG：10枚

本編：107枚

テキスト・擬音等を省いたCG：63枚同梱

あの日に見た動画は、昔からただ一人、
実母の『高梨怜子』を除いて、性的関心を抱かなかった僕にとって、
衝撃的な内容だった。

【第一章】

仕事を終わらせて帰宅した僕は、軽くシャワーを浴び、
もはや珍しくなくなった母が作り置きしてくれた晩御飯を食べて、
いつもの様に自分の忌むべき性的嗜好を矯正したいが為に、
自室にてアダルトサイトを覗いていた。

その日に覗いたのは、とある投稿動画のまとめサイトだった。

僕は初めて覗くそのサイト全体を一瞥してから、
管理人がおすすめと紹介している動画の一覧を順に、
事務的に再生ボタンを押していった。
だが、どの動画を視聴しても、僕の関心は常に母に向けられていた。

（今日もダメか…。）

そう思い始めた頃、次に再生する動画の名前に目が留まった。

『T梨R子　痴態映像記録』

「如何ですか？初めてペニスを咥えた感想は？」
「〝んっ…。」
「確かに『射精するまで離さない様に』とは言いましたが、別に…。
それとも…それがそんなにお好きで？」
「〝ん〟ん〟ん…！」

『〝んっ…ん〝んっ…！』
「おおっ…。」
『〝んぐっ…。』
「…そこまで咥えられる人は初めて見ましたよ…。」
『〝んふっぐっ…。』
「それでは咥えたままで、その口で、私のを扱いてください。」
『〝んっ！〝んっ…！』

「〝んっ…〝んじゅっ…〝んぐっ。」
「そう…そして舌で裏筋あたりを…。」
「〝うんっ。」
「〝んっ！〝んっ…んふっ…んふっ…んっじゅっじゅっ。」
「〝んじゅっ！〝んっじゅっ…んふっ〝んっじゅっ…ふっ。」

「んっ…んんっ…んふうっじゅぷっ。」
「これはっ…なかなか飲み込みが…っ。」
「んふっ…んっんっんんっぐっ…ぐっじゅっんぐっ。」
「んぐっ…んっんぐっんぐっんふっじゅっぐっぐじゅっぱ。」

「ん…んんっ…んっじゅっぐじゅっぱじゅぐっぷっ。」
「じゅっんっ…んっんっんっんっんっじゅっ。」
「ぐぅ…っ。」
「っうっ…んぐっんっ…っんっ…っんっぐっぷっ。」

「〝んっ〟んっんっぐっ〝ん〟んっ〝ん〟んっ〝ん〟んっじゅっ〝んじゅっぽっ。」
「〝んっぐっ〟んふっ〝ん〟ん〝ぐっ。」
「〝んっ出るっ！〟」
「〝んっ〟んっ〝んぐっぐじゅっ〝んんんっぐっじゅぐっぷじゅぽっ。」

ビクン
ビクッ
「んっっっっ？！」
「ふぅ〜っっっっ」

「ぐっんんんぐっぐっんぐっぐっんぐっぐっんぐっぐっ。」
「ぐっ…っ。」
「んぐっんぐっぐっんぐっんぐっぐっんぐっぐっんぐっぐっ。」

「んっぐっ…んっぐっ…んっぐっ…んっぐっ…」
「…んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…」

「んふっ。」
「まさかっ…飲み込まれるとは、」
「んじゅっんっふっんっじゅっ♪」
「ぐっ!?」
「んふふっ♪」

『本当は彼女の頭を掴んで、根元まで咥え込ませたかったのだが、
私の指示を律儀に守ってくれたばかりか、
私に対する侮蔑を露わにしつつも、拙いながらも献身的なフェラに私は、
その衝動を抑えた。
飲み込みが早く、また精飲には驚いた。
知識として持っていただけなのか、それとも初めてというのは嘘なのか、
それは分からないが、最後に彼女が私に向けた、
あの小馬鹿にした表情と、裏筋あたりを刺激した事で、
私の自尊心が更に刺激された。
ちなみに、私が『もう離してもいい』と指示するまで、
彼女は咥えたままだった。』

「かあ…さん…っ。」
それは間違いなく母だった。
長年愛している、そして心の奥底で犯したいとまで思っている
その女性だった。
「それに…誰？その男…。」
混乱していた僕は思わずそう呟いたが、心当たりがあった。
その動画は編集による不自然な間を挟んで、まだ続きがあった。

『もうそろそろ挿入してもいいのでは？』
『ぐっ…。』
『結構な時間、クンニして挿入するには十分なほどの、』
『これ…。』
『はい？』
『これ、本当に入るの…？』
『大丈夫だと思いますよ。』
『うっ…っ。』
『止めますか？私は別にそれでも構わないんですけど、』
『っ？いいわ…来て…っ。』
『痛かったら正直に教えてくださいね。』

『ぐっっっっ!!』
『んんんんっっっっ!!』
「これはっ…キツイ…っ…」
『うぅぐっっっ!!』
「だが、ナカはとても…って…」

『ごあごあっっっんっ!?』
『んっ…んっっっ…』
『失禁、ですか…。』
『んっぐっ…』
『それ、尿が止まるまで、待ちましょうか。』
『ちいっっっ…っぐっ…』

まって
『んっ…ちょっと…ちょっとまって…っ。』
『もう出ていないですよね？』
『だっ…だからまって…っ。』
『ぐっ…ねっ…ねえ…？聞こえている…？』
『…って…。っっっっまってっっっ!!!やめっ』

「ぐっっっっ!!"んんんっふっ!!」
「ぐっっっがはっっっ!!」
「んっっっふっっっぐっっっっっ!!」
ぶるん
ぶるん
ずっちゅ
じゅっぽ

『んんんんっふうっっ！』
『がっ！んぐっんんんっぐっ！』
『んんぐっっっんんんっふうぐぁっんんんんっふうっ!!』
ぶるん
ぶるん
ずっちゅ
じゅっぽ

『あっ!?がっっっ!!』
『あっっっ♡あっぐっっっっ!!』
『おぉおっ…!?』
『んぐんぐんっっっっっがっっっはっっっ!!』
ぶるん
ビクン
ずっちゅ
じゅぽ

「あっはっっっぐっっっ！」
「んっっっはっ！っはっ！っはっ！っっっ！」
「はぁっ…はぁっっっんっ…。」
「なるほど…。」

「んっ?!ぐぁっっんふ♡」
「ここ…ですね?」
「ちぃっっ!!!ぐっんんん!!」
「この様に突かれるのと…」
ぶるん
ぶるん
ずっちゅ
じゅっぽ

『んっっっっ♡』
『んっっっんんんっぐっっっっ♡』
『押し付けられながらの、どちらが…』
『それっっっやめっっっんんんっっっがっっっ♡』
『…分かりましたっ。』

「んっっっっんぐっ♡」
「んっんっんっんっんっんっっっっっ♡」
「やめっっっ♡やめっ♡っっっぐっっんんんんっっ♡」
「んっんっんっんっっっだめっっっ!!だめっ♡もうっっっんっんぐっっっ♡」

「んんんんんんんんっっっ

『んんんんんっっっっ!?』
『なっがっ♡ながっ♡んんんっっっ♡』
『なっっっんんんっぐっっっ♡』
『あっまだっっっんふっっっ♡でりゅっっっまだっっっ!!』

『あ〜あ〜あ〜あ〜っ〜あ〜んっっっっはっ♡』
『あっっっだが〜いっ♡はっ♡はっ♡はっ♡』
『あっっっ〜あはっっっ〜あはっ〜んんんっふんぐっっっ♡』
『なかっっっ〜んはっ〜んんっぐっっっすごっっ♡っ〜すごっ〜いっっ♡』

『事前にスポーツ飲料水に、ある薬を盛って、
その事を知られずに飲ませてみた。
効果は聞いていたが、私は実際に使ってみた事がなかったので、
クンニをしつつ、指を入れながら、それが効いてくるまでを待ってみた。
挿入による痛みの緩和と識別、判断力の低下、
そしてイキやすくする為の薬なのだと、聞いていた通りの効果を
確認してから挿入した。
この後も私は勃起したままで、本当は続けたかったのだが、
急遽用事が入ったので、しぶしぶこの日はこれで終わった。
意識が朦朧としている彼女にピルを飲ませた時に、
彼女は自分が生で挿入された事、そして中で射精された事に
初めて気づき、絶頂の余韻に浸り、震えながらも私を睨んだ。

彼女が言うには、どうやら私の勤めている会社は、
社会的に暴力団と認知されている団体が運営しているらしい。
初耳だった。
彼女は自分の息子を、そういう所で働かせたくはなく、
また彼女の息子が大学生の時に、誘い引き入れたのは私だったので、
私をあたかも誘拐犯のように非難し続けた。

『ご自身からご子息に、ご説得してみては如何ですか?』

私はそう彼女に返してみても、どうやら彼女の息子は、
今勤めているその会社を辞めたくはないらしい。

連日続く非難。

彼女の息子を呼び出して、直接『自主退職してはどうか?』と

私自ら説得しようと考えた事もあったが、

それだと新たな問題が生まれてしまう。

憔悴した私は、とうとう開き直って、彼女に次の事を口走ってしまった。

『私の愛人になってください。

そうすれば、息子さんの手は知らず知らずのうちに、

汚さなくて済みますよ?』

彼女は驚き、私に敵意を向けて睨んだ。

『早速今晩如何ですか?これ、私の連絡先です。

二十時からでしたら私は大丈夫なので、お電話お待ちしております。』

あとあとになって、彼女が録音機材等を
忍び込ませていたのではないかと、その事が脳裡を横切ったが、
杞憂に終わった様だった。

二十時過ぎに、彼女から電話が来た。
これから彼女と一晩過ごす事を盗み聞きでもしていたのか、
女癖の悪い同僚から二錠の薬を手渡されて、仕事場を後にした。

フレームにカメラが仕込まれている眼鏡を掛けて、
そして部屋に一台、盗撮用カメラを仕込んでから、
彼女を迎えにいった。

あとはご覧の通りである。

なお今回、性格以外は自分好みの女性を抱ける事の嬉しさから、
ついクンニの前に眼鏡を外してしまい、また部屋に仕掛けたカメラには
私が画面の殆どを占めていたので、編集で一部カットを施した。』

【第二章】

母の相手の男性は、僕の上司だった。

大学生の時、就職先について迷っていた僕に、探偵業に興味はないかと話しかけてくれた人だった。

『時には人の探している物を探し出し、時には人の秘密を暴き出す。』

手振り身振りで探偵業について語っている、その面白い人に生返事をした結果、ズルズルとそのまま気付いたら就職していた。

職場の人達と、その雰囲気は穏やかで、仕事柄不規則な就業時間ではあるけれど、十分な休みが与えられて、相応の給料が支払われて、全く苦ではなかった。

『ここに就職してよかった。』

僕がそう実感し始めた頃、

母からその仕事を辞める様にとの指示を受け始めた。

「おはよう。」
「おはよう、かあさん。」
「今日は仕事、休みよね？」
「いいや、今日は昼から出勤なんだ。依頼内容の都合で。」
「そうなの…。…ねぇ、今の仕事、楽しい？」
「うん、楽しいよ。でも、浮気調査とかは…ほとんどの依頼人は、その調査結果に落ち込まれるからね。ちょっと…。」
「そう…。」

「ねぇ、今の仕事で何か不満とかない？さっきの調査とか以外で。」
「ないよ。休みを休みとして扱ってくれて、人間関係も良好で、給料も相応、本当に毎日が充実している。それに僕は別に、浮気調査に不満なんてないよ。」
「でも、就業時間がバラバラ、生活リズムが一定じゃないでしょ？」
「それはそうだけど、仕方のない事だよ。それに、それを不満に思うかどうかは、」
「そういう事の積み重ねが、自分の気付かないうちに、健康を害する事に繋がるのよ？」

「でも、僕は、」

「今からでも公務員、目指してみたらどう？
それなら母さんは応援できる、安心もするわ。」

「…よくわからないけれど、知り合いから聞いた話だと、
人間関係ややこしいんでしょ…？」

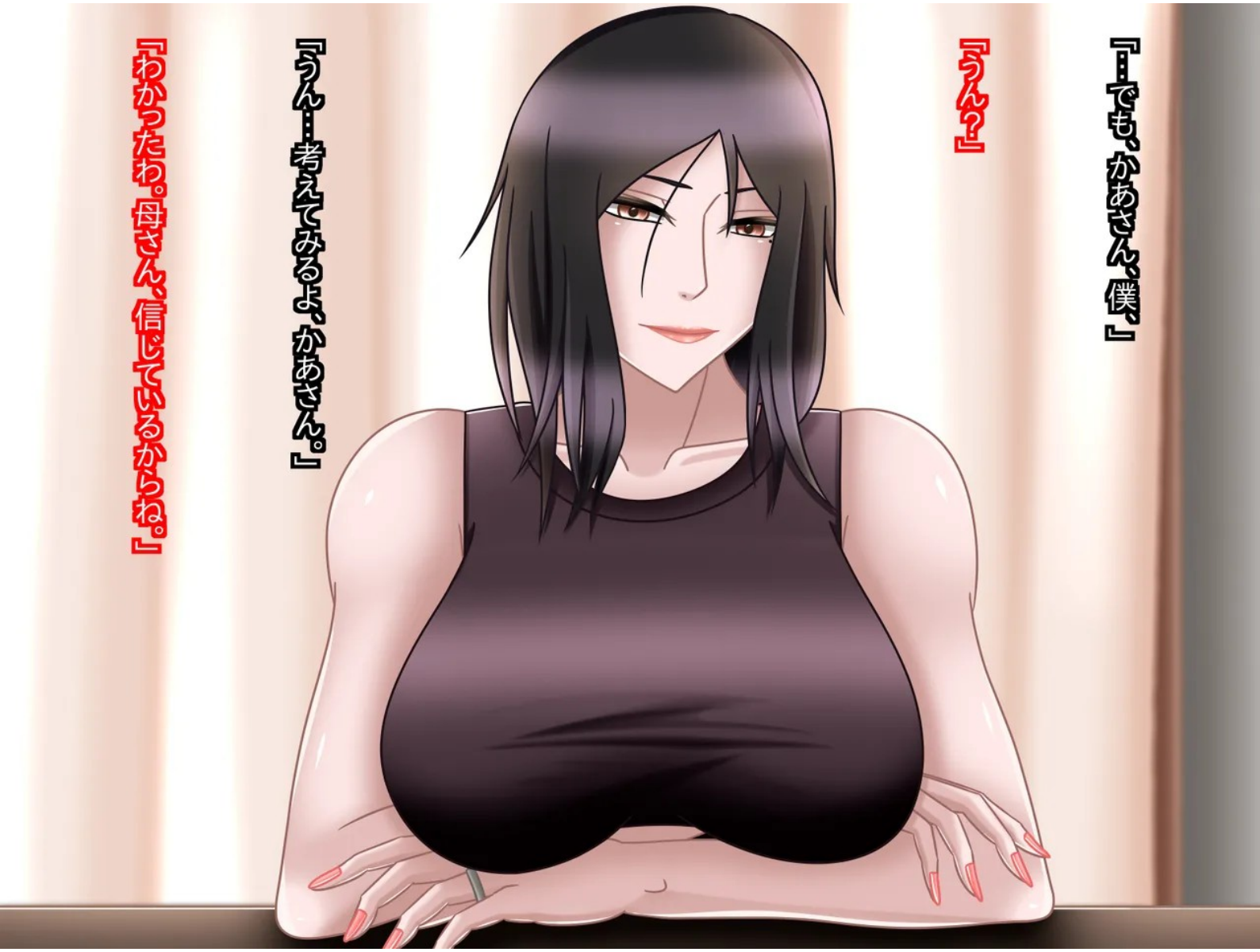
「それは聞いた話でしょ？」

「それに就職してから、まだ三カ月しか経っていないよ…。
その事を指摘されたら…。」

「母さんね、調べたのよ？その会社の事。」

「そうしたらね、どうやらそこは社会的にいい声を聞かない団体が絡んでいる様なのよ。」
『えっ…。』
「そんな会社、すぐにでも辞めた方が、いいんじゃないかしら？」
『…でも、かあさんもそれ聞いただけで、』
「それに、依頼人？や浮気調査の結果、多額の負債を抱えさせられた人達から逆恨みされた事は？」
『…ない…けど？』
「そう、じゃあこれから先、そういう事があるかも知れないわね。」

「母さん、心配なのよ？」
「うん…。」
「自分の子供を、そんな危険な場所に居させたくない
母さんの気持ち、分かってくれるかしら？」
「うん…。」


『…でも、かあさん、僕、』
『うん？』
『うん…考えてみるよ、かあさん。』
『わかったわ。母さん、信じているからね。』

『考えてみる。』
あの時はそう返してみたけれど、結局僕は会社を辞めなかった。
母が心配してくれている事は、十分理解しているつもりだった。
しかし、僕は少なくとも母からの指示には従いたくはなかった。
『よくない噂のある団体が絡んでいる。』
『今の仕事で、今後自分の身に降りかかるかもしれない危険性。』
それらはその時まで知らなかった、または意識した事がなかったが、
それでも、愛している女性からの指示には従いたくはなかった。
僕は愛されたいのではなく、愛したかった。

『一体いつになったら辞めるの?』

母と顔を合わすと、話題はそれだけになっていった。

『いい加減にしないと、会社に出向いて辞めさせるわよ。』

愛している女性の事を少しずつ嫌いになっていく事が辛かった。

そんな日々が続いたのち、突如としてその話題は途絶えた。

母との会話の話題も、それ以前に戻っていった。

だけど、母は以前と同様ではなかった。

僕の事を気づいていない所で、母は一人で震えている事が多くなっていった。

『かあさん、大丈夫…?体調悪いの…?』

ある日、そう尋ねた僕に、母は今まで一度も僕に向けた事のない憎む顔を一瞬だけ覗かせた。

『だ、大丈夫よ。何?母さんを心配してくれていたの?ありがとう。』

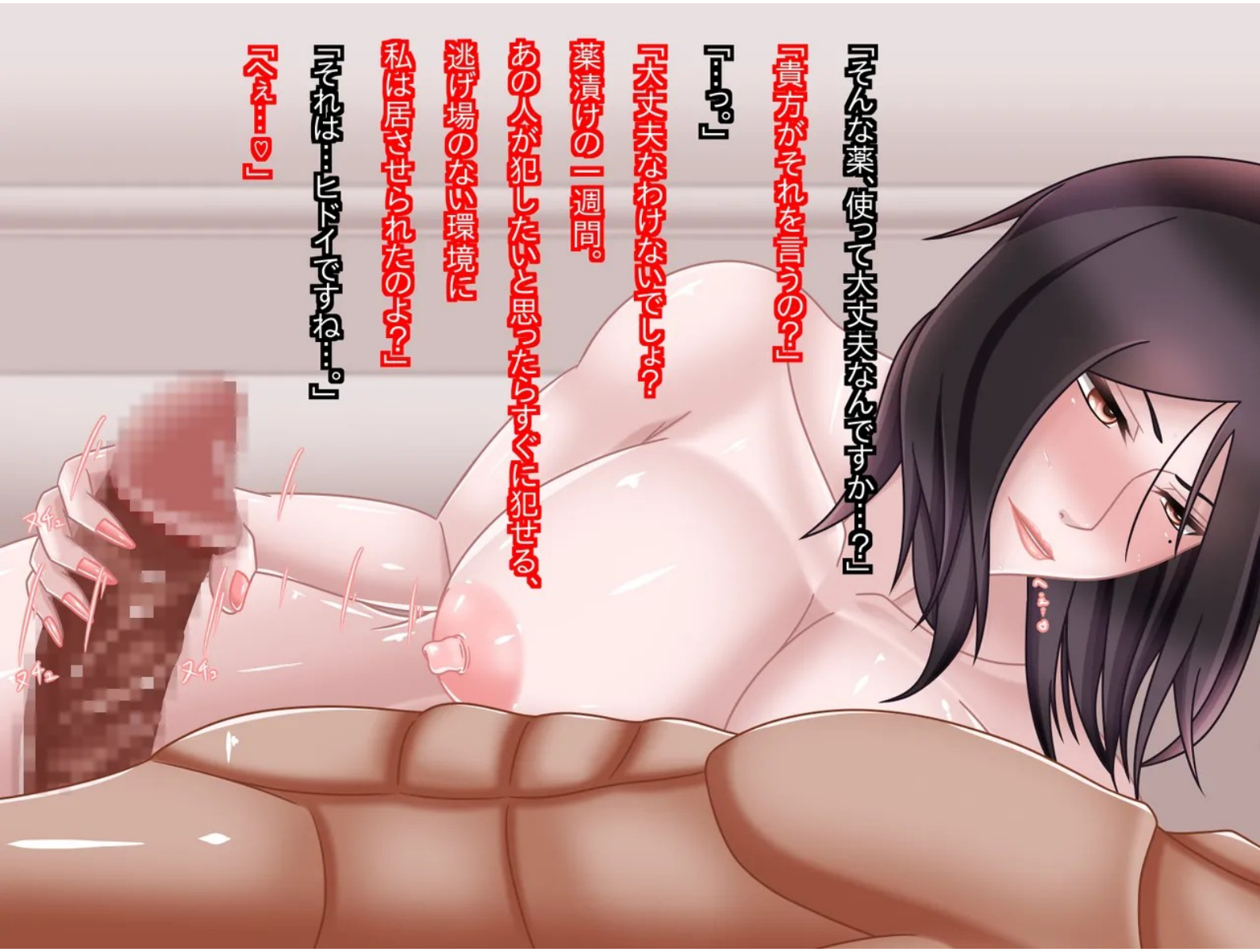
それから母は、知り合いと一週間の旅行に出かける事を僕に告げた。

母のその旅行の全容は分らない。
ただ一週間とだけを僕に伝えていた。
だけどそれは、あの日から数日経ってアップロードされた、
例の元上司による別の動画を介して漠然とだが分かってしまった。

『加減の方は大丈夫？』
「ああ、いい具合です。」
「そう♡それじゃこのまま、」
「あの…。」
「ん？♡」
「あいつと一週間、何を…。」
『…あら、興味あるの？♡』

「ねぇ、私にあの時、薬を盛ったんでしょ？」
「…はい。」
「誰か、から貰ったのよね？」
「…そうです。」
「んっ♡…誰から？」
「私の…同僚ですね…。」
「そう♡貴方の悪い同僚から♡
どんな事をされたと思う？♡」

『…どんな事をされたんですか…？』
「ん？♡女でしか味わえない快楽、かな♡
それを徹底的に叩き込まれちゃったの♡」
『…？』
「貴方があの人から貰った薬、
アレはまだ優しい物だったのよ？
これで容易に想像がつくのではないかしら？♡」


「そんな薬、使って大丈夫なんですか…？」
「貴方がそれを言うの？」
「…？」
「大丈夫なわけないでしょ？
薬漬けの一週間。
あの人が犯したいと思ったらすぐに犯せる、
逃げ場のない環境に
私は居させられたのよ？」
「それは…ヒドイですね…。」
「くぇ…♡」

『ぐっ!?』
『これ、握りつぶしてほしい?♡』
『う!?』
『冗談よ?でも…早く射精しないと、二度と使えなくなるかもね?♡』
『もっ、もう出るっ!!』
『ほらほら♡』

「あ♡」

「やっぱり一回射精しただけだと、
まだまだ固いままね♡」
「ああ…。」
「貴方には感謝しているわ。
貴方のおかげで、あの人の女になれたのだから♡」
「えっ…？」
「本当はもうあの人の下に
戻らないといけないんだけど…
サービスしてあげるわ。
ちょっとシャワーでこのローション、
洗い落とすわね♡」

『私は彼女と思わぬ愛人関係を結び、その日の翌日から少しずつ
芽生え始めた恐怖を抱えながらも、
それを動画投稿等で誤魔化し続けて、
彼女に気をつかいつつ抱きしめる、そういう日々を過ごしていた。
そんなある日、件の同僚が私に話かけてきた。
『お前の動画、面白かったよ。』
私は驚き、言葉を失った。
『あの女、危険だな…。お前も辛かっただろう?
俺とお前の仲だ。俺が何とかするから、一週間、貸してくれないか?』
私は目の前の男に震えあがってしまっていた。
『お前も…、もう気付いているんだろ?
これを機にどう?今、人少ないんだよね。』

「ぐん♡んんんっふ♡んんっふ♡」
「っ!?」
「んふっ♡ぐっじゅ♡んんんん♡ぐんっじゅっ♡」
「咥えられただけでっ…違うっ…っ!」

『んんんっんんんんっ♡』
『んっじゅっんんんっんっんっ♡』

『ぢゅ〜んんんんっんっじゅ〜んんん〜♡』
『なっ…ぐっ……』
『んっふっふっ♡ぢゅ〜んぢゅ〜んっっっっじゅっふっんっ♡』
『んっふっんんんっふっ♡』

『ぐんっじゅ♡ぐんんっふっじゅっぷっっっぐんっぐっぐんっぐんっ♡』
『んぐんぶっぐんんんっぐんっうっじゅじゅじゅじゅっじゅっぷ♡』
『も、もうちょっと加減を…このままだと、』
『んんん～？♡ぐんっぐんっじゅっうっぐんんんっんん♡』

「んぶぶっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んんんっ♡」
「ぐっじゅっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んんっ♡じゅっ♡うんっ♡」
「ぐっ!?」
「じゅぶぶっ♡んっんっんっぐっじゅっ♡んんっ♡んっ♡」

『んんんんっ♡』

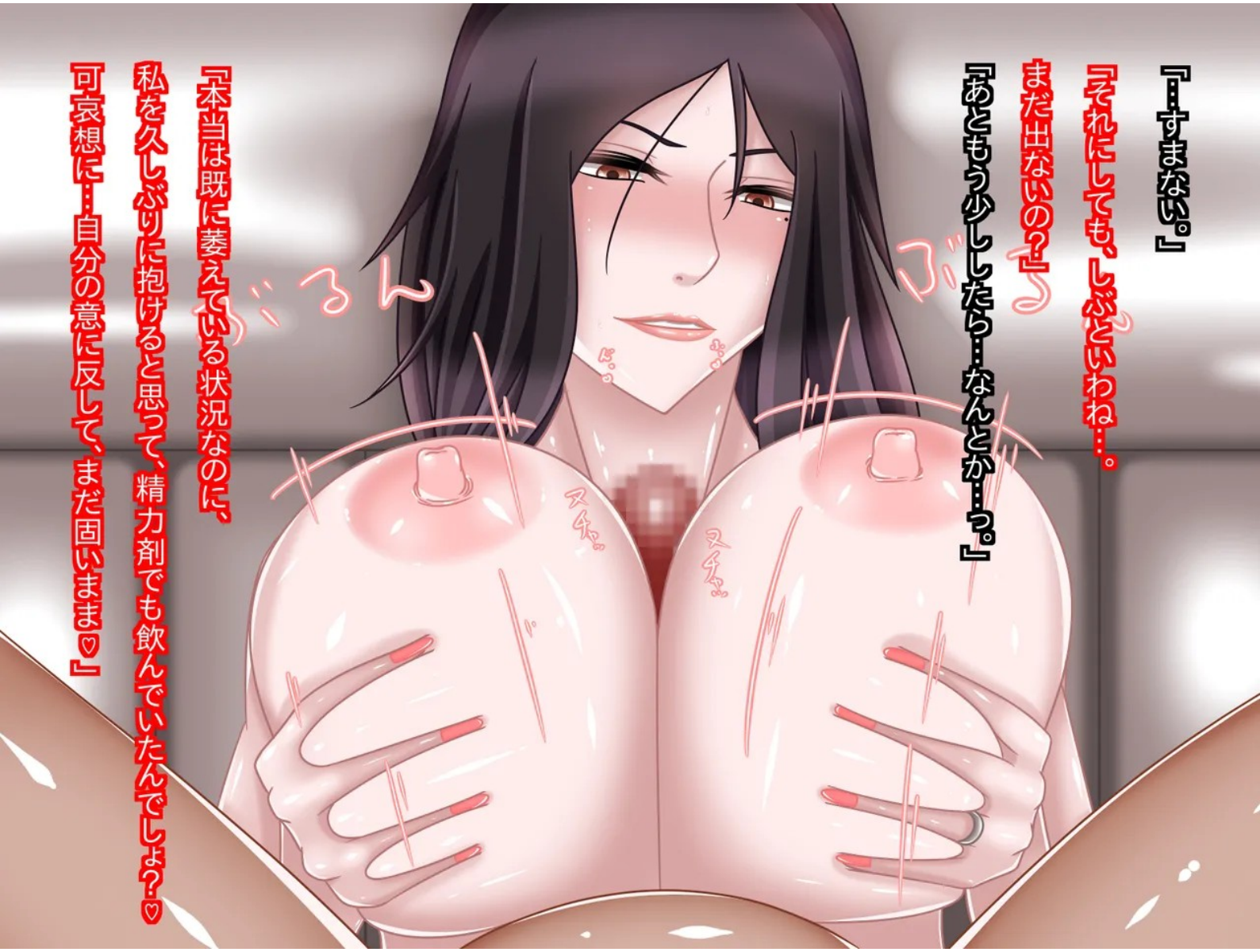
『んんんぐっんっぐんっぐんっぐんんっぐ♡』
『んふっ♡んっふんんっふんっふっふっ♡』
『ぐっ…飲みながらっ…っ。』
『んんんっんんっ～♡んっぐんっ♡』

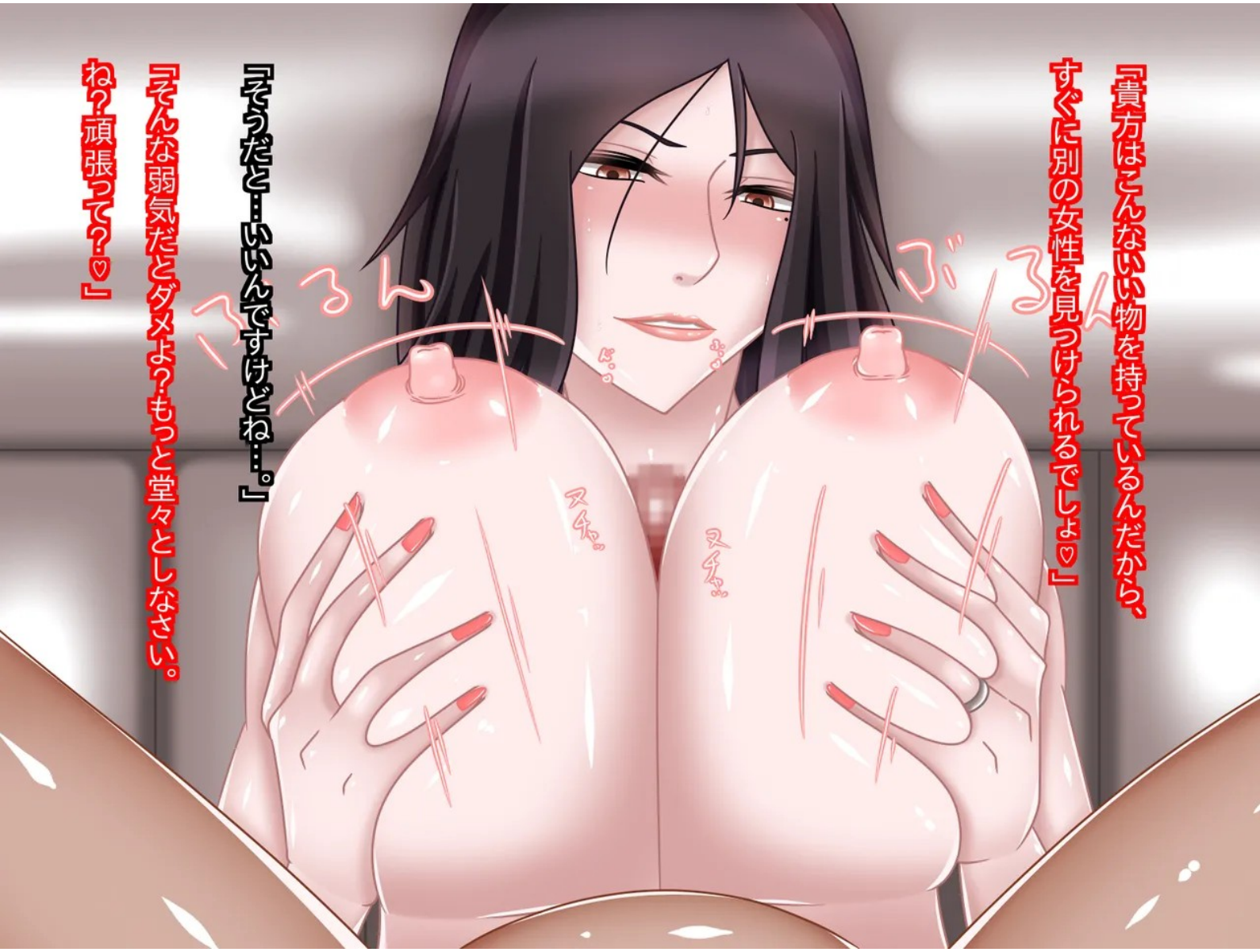
「んぐっ♡んんん～じゅぷっ♡んぐっ♡」
「うっんんぐっぷっんんんっじゅぷぷんっ♡」
「何をされたらそれほどの、」
「んぐっぷっ♡じゅぷっ♡」
「ぐっ?!」
「んんん～っ」

彼女は私の身体に、しがみつく様にしゃがみ込み、
『あの人』によって仕込まれたフェラを教えてくれた。
それは今まで体験してきたフェラの中で、一線を画すものだった。
彼女はフェラをしながら、私の様子をじっと観察して
どこをどうすれば気持ちいいのかを探り、そして的確に当てていた。
『別に私の頭を掴んで、自分の気持ちのいい様に
動かしてもらっても構わなかったのに。』
その言葉に私は動揺してしまった。
彼女は余裕を見せながら横になり、私を次の快楽へと導いてくれた。

「胸で…ですか…。」
「ええ、そうだけど？何、不満なの？」
「いいえ、そんな事は。」
「この後であの人に抱かれるのよ？
アソコを汚させるわけないでしょ？
それから、貴方とはこれで最後。」
ぶるん
ぶるん

「さっきも話したけれど、貴方には感謝しているのよ？
私は今、とても幸せな日々を過ごしているんだから♡」
「あいつと引き合わせたから、ですか…？」
「ねぇ？『あいつ』って呼ばないでくれる？
手でしてあげている時もそうだったけど、
不愉快なんだけど？」

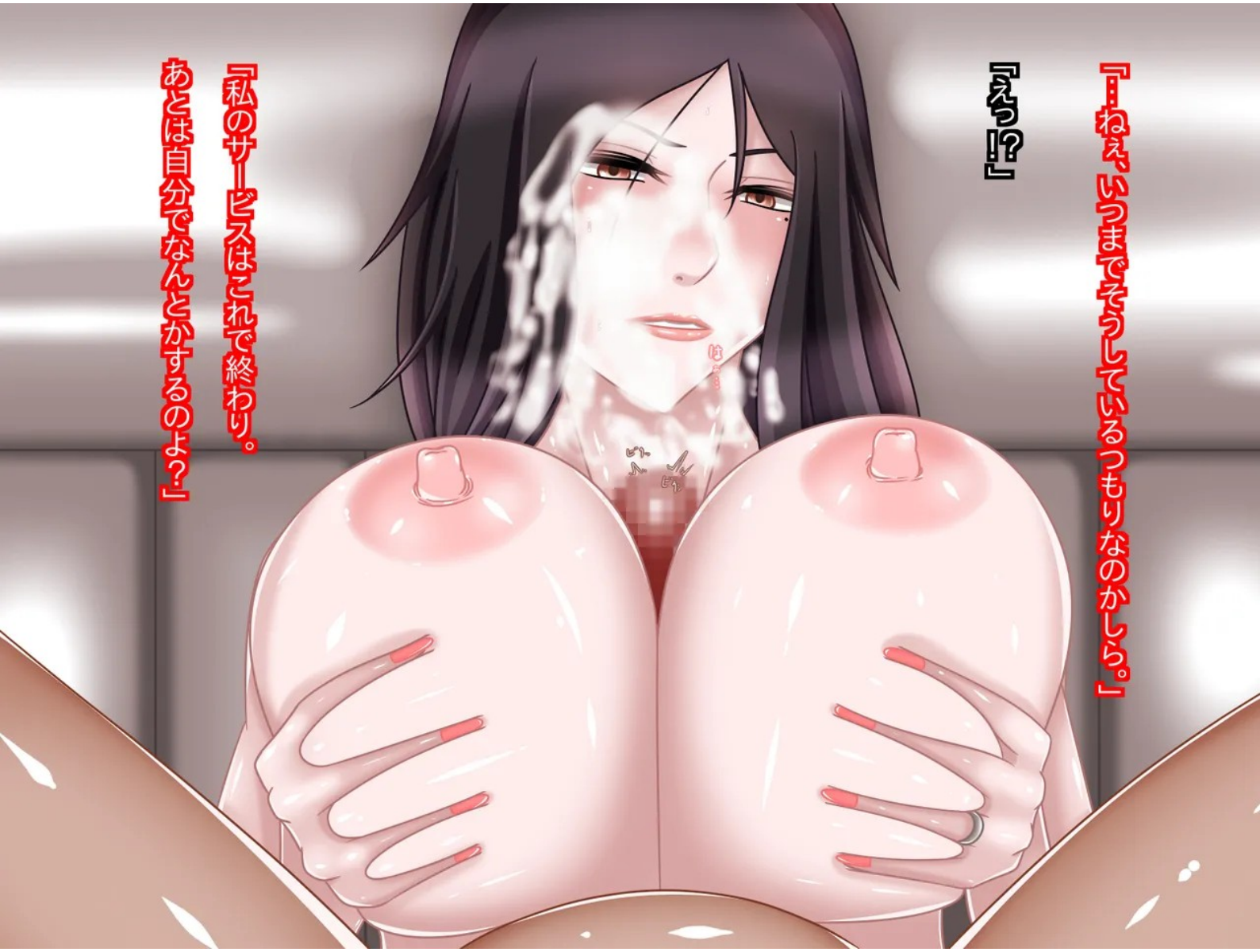

『…すまない。』
「それにしても、しぶといわね…。
まだ出ないの？」
「あともう少ししたら…なんとか…っ。」
「本当は既に萎えている状況なのに、
私を久しぶりに抱けると思って、精力剤でも飲んでいたんでしょ？♡
可哀想に…自分の意に反して、まだ固いまま♡」


「貴方はこんないい物を持っているんだから、
すぐに別の女性を見つけられるでしょ♡」
「そうだと…いいんですけどね…。」
「そんな弱気だとダメよ？もっと堂々としなさい。
ね？頑張って？♡」

『つぐ!?』
『あら？♡可愛らしくビクビクしてきたわね♡』
『んっ!!』
『さぁ、出しちゃいなさい♡
そのまま私の顔を汚しちゃってもいいから♡
ほら、頑張って♡』

『ん!?』
ぶるん
ぶるん

「はぁっ…はっ。」
「スッキリした？」
「はい…。ありがとうございます。」
「そう、それはよかったわ。」


「…ねぇ、いつまでそうしているつもりなのかしら。」
『えっ!?』
「私のサービスはこれで終わり。
あとは自分でなんとかするのよ？」

彼女は忌々しい様子で汚れを洗い落として、
未だ勃起したままの私を鼻で笑いながら服を着て、部屋を後にした。
私はそれから暫くして、退職届を提出した。

これまでの件で少し落ち着きたかった。

趣味という趣味もなく、ただ生活するのに必要最低限な物だけにしか

お金を使ってこなかった私には、暫くゆったりとした日々を過ごすのに

困らないほどの、十分な貯金があった。

そういう日々が続いていたある日、一本の電話が鳴った。

元同僚からだった。

『久しぶりだな。急に辞めて驚いたよ。

それから聞きたい事があるんだけど…今、どうしてる?』

私の現状を問われて、答えられる範囲内ではあるけれども、

一つ一つ答えていった。

『うん…一つ、お前に頼みたい事があるんだが、聞いてくれるか?』

私は話を促した。

『そういう重労働ではあるから、もちろんそれなりの報酬は出せる。

お前の精力を見込んでの事なんだが…どうだ?』

一通りの話を聞いて、私は二つ返事で引き受けた。

その日、私の新しい仕事が決まった。

恐らく、この場に私が新しく動画を投稿する事はなくなると思う。
別の機会で私を見かける場合があるかも知れないが、
その時、実に満足気な私の姿が、映っていると思う。』

【第三章】

先月、父が単身赴任先から帰ってきた。
その日は、僕は仕事が休みで、自宅で過ごしていたが、
母は朝早くから既に外出していた。

夜遅くに母が帰宅して、およそ三年ぶりの父との再会を
喜んでいたが、僕はそれに、どこか違和感を覚えていた。

「んっちゅ、あ～ん♡んっちゅっ♡」
「っ怜子っ、んっ。」
「お仕事、お疲れ様♡んっぬっちゅ♡んん♡」
「っは…ああ、ありがとう、」
「ねぇ、トイレで何がしたかったの？♡」
『えっ!?えっと…、』
ヌチュ
ヌチュ
はぁ♡
はぁ♡

「んっふ♡んちゅっくちゅっ♡くちゅんっちゅ♡」
「んっ!?」
「んっちゅくちゅっんふ♡くちゅっんっちゅ♡」
「くちゅっへ♡ちゅちゅっんっちゅ♡ちゅちゅっんっちゅ♡」
くちゅ
んっ
ん♡

「んふふ…。んっちゅ♡」
「っはぁ…な、何だか激しい、っんっ。」
「くっちゅっ♡…ん…だって、久しぶりなんだもの♡」
「ねぇ…疲れている所、悪いけど…やっぱり抱いてほしいなぁ…♡」
「でも、明日から仕事が、」
「これ、このままで大丈夫？♡寝られるの？♡」
［怜子…っ。］
ヌチュ
ヌチュ
はぁ♡
はぁ♡

僕は尿意から、ふと目が覚めてしまい、
トイレに向かおうとしたその途中で、
リビングで母と父がキスをしていたのを見てしまった。
父は、母の積極的なキスと言葉に戸惑いを見せつつも、
欲情していったが、その濃さと反して母はいたって冷静だった。
僕は母を抱ける父に、改めて嫉妬していた。
母はその日に、何かこだわっていた様子だった。

それから暫く経ったのち、初めて僕は元上司の動画によって、
母が置かれていた状況を把握した。

殺意が沸いた。
それと同時に興奮もした。

当初抱いていた、母を犯したいという願望は少しずつ、
母が犯されている姿が見たいという願望へと変わっていった。

『自分の子供を守る為に、母さんは常日頃、身体を鍛えているのよ。』

その母の肉体。
それに欲情する男によって、その意味を壊してほしいと、
母を屈服させてほしいとまで、僕は思う様になっていった。

『母を愛したい。』

僕のその思いは、その様に思わせてしまっていた。

【第四章】

『素人人妻シリーズ　vol.5　R子　実録レイプ』

その作品には僕の母が出演していた。

人妻が街中で男にナンパされて、食事をともにして、

そしてそのままラブホテルの一室でセックスをするという

よくみる筋書きだった。

母と男優の絡みは終始、母がリードしていた。

何度かクンニで軽く絶頂を迎え、男優にコンドームを着けさせてから

挿入をさせて、射精を促す言葉を紡ぎながら、

手慣れた様子で射精させた。

一連の行為の後、男優が母に感想を問いかけて、

母は満足したと、そう見える様に気をつけながら、受け答えていった。

『カットっ!!』

監督らしき人物が大げさに、そう声を張り上げた。

『お、お疲れ様でした…っ。』

少し驚いた母は恭しくそう挨拶をして、シャワーを浴びようとした時、部屋の出入り口から一人の男が入って来た。

『お久しぶりですね。』

『えっ…。』

男はその場で、手早く衣服を脱ぎ捨て、そして大きく勃起したペニスを母に見せつけながら、近づいていった。

『監督っ!?これはどういう事ですか!?』

母のその声を、その場のキャストやスタッフ達は、一様に無視して、その場を後にする。

その光景に母は恐怖を露わにしたが、すぐにその男を強く睨みつけた。

『貴方、ここに何しに来たの…っ』

既に目の前に立たれて、怯みながらも、凄みを利かせた母の問いに、その男は堂々と、自信に満ち溢れた様子で答えた。

『見ての通り、貴女を犯しに来たんですよ。』

その男の答えを聞いた瞬間、母は出口に向かって逃げ出した。
だが、男に腕を掴まれ、容易くその腕の中へ収められてしまった。

母は強く抵抗した。

『撮影、見ていましたよ？
もう十分過ぎるほど…濡れていますよね？』

『あれはっ…この為のっ…。』

息をのみ震える母の身体を、男は強引にベッドの上に戻して、
ガラス張りとなっている浴室の方へと押し向けてから、
後ろから犯し始めた。

『〜あ〜んっ♡』
『ん？』
『〜あっ♡すごっ…!!』
『〜あっ〜んんんっ〜んあ〜っあ〜あ〜っくうっ…っ♡』
「貴女は今、何をされているのか、自覚していますか？」
『〜んっもちろんよっっっ♡〜んんんっ〜あはっ〜あああっ…っ♡』
『〜んっ、貴方は…っぐっ…私をっ〜あっっっ、犯したいんでしょう？♡』

「んはっ♡あ〜あ〜あ〜んっっっ♡んっ、犯させてっあげている〜の〜よっ♡」
「開き直り、ですか。」
「あんっ♡んんんっ〜あっはっ♡〜あああんっはっ♡」
「お尻を突き上げてまで、
自ら進んで快楽を得ようとするその姿勢、
呆れますが、好きですよ。」
「えっ?!んんんっふっっっあ〜あ〜あ〜んっ〜んっふっ♡」
「あっ♡だ〜めっっっ♡」
ぶるっ。
ぶるっ。

『んぶぐぅぅぅ〜〜うぐ〜〜うぐぅっ♡』
『ううぅっ♡ふぶっふぶっふぶ〜んんんっ〜〜あっぐぅ〜んんんっ♡』
『あいつとは、あれからどうなんですか？』
『ぐんぐんぐんっ!!〜〜あなたにはっ
〜〜ううっ〜んっ関係のないっ事っっっでしょっ〜〜あっ♡』
『もうあいつに抱かれていないんですよね？』

『ぐっっっ♡あ゛ん゛ん゛んっふっ♡゛あんっ♡ぐっっっっ♡』
『どうやらその手の、お偉いさん方の相手をさせられているみたいじゃないですか。』
『うるさ゛いっっっ♡゛ん゛んっぐっ♡』
『あっ♡゛ちょっとっっっ゛あっ!!イクっ♡』
『イグっっっ゛ん゛んっぐっ゛イグ゛イグっっっ♡゛イグッ!!』

『イグっ!!〝あ〟あ〟あ〟あ〟あっっっ〝ん〟ん〟んっふっ♡』
『〝んっ〟んっ〟んっ〟んっ〟んっ♡』
『失禁癖は相変わらずですか？』
『〝そこらへん〟のっっっ力が〝ぬけるっっっの〝よっ〟んんんっぐっっ〝うん♡』
『貴女の小便がシーツに染み付いたら、どうするんですか？』
『〝ぐっっっ♡〝んんんっはっあ〟んっぐっぐっ♡』

「あんっ♡んんんっ♡あっはぁっ♡はぁっはぁっはぁっ♡」
「やっぱりっ♡んはっ♡んっ♡すごいっ♡」
「…っ。」
「あっ♡んふっ…。どうしたのっ？っはぁ♡」
「ねぇ♡アレ♡押し付けながらの…アレ、やってよ？♡」
「はぁっ…。」

「あ゛あ゛あ゛あ゛っっっ!!!ん゛ぐっ♡」
「ん゛っ゛ん゛っ♡ん゛ふっ゛っっぐっっっぐっ゛ん゛っ゛ん゛っ♡」
「少し、貴女に付き合ってあげますよ。」
「ん゛ふっ♡ありがとっ♡ん゛んんっぐっ゛ん゛っ゛ん゛ぐっ♡」
「ん゛っ゛ん゛っふっ゛っっっ゛あん゛っ゛ん゛っ♡」

「あなだっだけ"よっ?♡
"わたしの"っっっ"き"もちの"いい"どころっっっぐうっ♡」
「っっいでぐれ"るのっっっんんんっ♡」
「それは、この締め付けの強さだと
並大抵の男では…ね?」
「ほんとっっっんっ♡自分だちだけっ"ま"んぞくじでっ!!」
「んっ"んっんんんんっ♡」

『んっっっ♡〝んぐっぐぐっ♡〝んんんっ〝っっ♡』
『あいつが相手でもですか？』
『んんんっ〝っっぐっ♡できたっ!!ちっちゃかったけどっっっできっっっ〝んぐっ♡』
『でもそれは、あの薬のおかげ、ですよね？』
『んっ〝んっ!!〝んぐっ〝っっ〝っっ〝っぐっ〝んっ♡』
『先日、違法薬物として認定されて、製造元つぶされたんですよ？可哀想に…。』
『んっ？〝っそっ!!〝あっぐっぐっっっ〝んふっ♡』

『うそっ!?"うそよっっっ!!"うっ"うっ"んっ"んっ♡
"あれが"ないとっ…"わたしっっ"んっ"うっ♡』
『んっふっ♡"んんん"ぐっ"うふっ"んっ"んっ♡』
『ぐっ!?ナカがっ!?』
『んっきてっっっ!!出してっ!!"んっっっぐっ♡"またイキそうっ♡』
『あ"あ"あっぐ♡イクっ…"イグっ♡うぐっっっっ♡"んっ!!』

『んんんんんんっっっ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡』
『んっはぁ♡んっ♡♡♡♡♡♡♡♡』
『んっふ♡♡♡んんんっっっ♡♡♡♡』
『んっっんっっっっ♡♡♡♡♡♡♡』
『んっ!!』

『〝あっ♡〟んがっっはっ♡〝あっっっ〟いっ♡〟んんっ♡』
『〝んんんっふっ♡がっ♡はぁっはぁっ♡』
「ぐっ、搾りとられ…っ。」
『〝あんっ♡〟あっっ〟んっ♡出しっっずぎっ♡』
『〝おしづけ〟ないでっっっ♡
『〝もっっっだめっ♡〟あしっっっがっっ♡〟むりっっっ♡〟んはっ♡』

母は足元から崩れ落ちた。
全身が快楽によって波打たれているであろう、母の姿を見た
その男は、不気味に歯を覗かせた。
母は脚を掴まれ、
仕込んでいるカメラに映る場所まで引きずられた。
そして…。

『ん”ん”ん”ん”んっっっっ!!」
『犯しに来た。』
私はそう言いましたよね?」
「ん”ん”んっ”あ”あ”あ”あ”あっっっ!!」
「少しだけ付き合ってあげましたよ。
もう十分ですよね?」
「んっぐっ”うっっっぐ”う”う”うっ!!」
「そ”れっだ”めっっっ♡♡”ほ”んどっっっじ”ぬっっっ!!っっっぐ♡♡」

「ぐっぅぅぅうっぐんぐんっ♡ぐんんんっ♡♡♡いっいぎがっっっ!!!」
「んふっっっ♡んあぁあっふふふっっっ!!!んっっっ♡♡♡」
「この体位、如何ですか？」
「だめっっっ!!!いやっやめっっっ♡♡♡あぁあイグっ!!!」
「イグっイグイグっっっ!!!あぁあっぐぅぅうっイグっ♡♡♡」

『ぐぐぐぐぐぐぐっ♡♡♡』
ビクッ
『ぐぐぐぐっ!!ぐぐぐぐっ♡♡♡』
『あぐぐぐんんんぐぐぐぐぐ♡♡♡』
『んんんんっぐぐぐぐ♡♡♡んぐぐぐぐっ!!!』

『〝は〟あ〝あ〝あっっ〝んふっ!!!
〝はぁっ♡はぁっ♡はぁっ♡はぁっ♡っ〝あっ♡」
『〝んっはぁっ♡〝んっ♡〝あっはぁっ♡』
「今ならまともに、息が吸えますよ。
さぁ、深呼吸して…。」
『〝んはっ♡はぁっはぁっ♡んっはぁぁぁぁ、」

「あ〜あ〜あっ!!?がっっっは〜あ〜あ〜あっ!!!」
「はい、では続きを。」
「あっがはっ!!!お〜ま〜えっっっ!!!」
「はい?」
「ごろすっっっ!!!ぜった〜いっっっ!!!」
「それだと貴女が困るだけですよ?」
「なにがっっっ!!!あ〜あ〜あ〜っっっぐぅっ♡♡♡」

「”あ”あ”あっぐ”うっ♡♡♡ ”うっぐっっっ”あっはっ♡♡♡」
「あの薬が欲しくても、
もう手に入らないんですよ？」
「”ん”ん”ん”っ♡♡♡ だか”らっ!!?
”そ”れがっっっ”なに”よっ”んんんっ♡♡♡」
「私がその薬の代わりに、
いいえ…それ以上の物になってあげますよ？」
「”んっ”んっ”んっっっ♡♡♡ ”んっぐっ”うっっっぐっ♡♡♡」

「〝あっはっっっ♡♡〝あああっぐっ〝うっ♡♡♡はっ♡はっ♡はぁっ♡」
「病院で薬の名前、言いたくないでしょ？
ご家族にその事を知られたくないでしょ？」
「〝い〝やっっっ〝いやっっっ!!〝あっはぁっ〝あっ〝あ〝んっ♡♡」
「私が助けてあげますよ？」
「〝あ〝あ〝あ〝ん♡♡〝あはっ〝あっ〝ん〝ん〝んっっっ♡♡♡」

「あ〜あっ〜あっ♡♡〜あ〜ん〜んっはっ〜あはっっっ〜んはっ♡♡」
「その為の、しつけ、なんですよ。」
「あ〜あ〜あっ♡♡〜い〜いっ♡〜それでっっっ〜いっっっ♡♡」
「もうっ〜イギぞう〜なのっっっ!!!〜イカせでっ♡♡〜お〜ねが〜いっっっ♡♡」
「んっ!!!」
「イッグっ♡〜イッグっっっ!!!〜あ〜あっっっだめっ〜イグっ!!!〜あっ♡♡」

『ぐっぐぐぅうううっ!!!んぐんぐんぐんっっっ♡♡♡ぐっ♡♡」
『んっ♡んっ♡んっ♡んっっっっ♡♡」
『これが好きなんですよね？」
『んんんっっっっ!!!イッでいる♡のにっっっ♡♡あ♡あ♡あ♡っっっ♡♡」
『んぐっ♡んっ♡んっっっふぅんっ!!!」

「〝ん〟んっふっっっ!!ぐっぐっぐっ♡〝んんんはぐっ!!」
「ずごっっずごっ〝いっ♡♡〝イッでるどぎっっっ!!!そ〝れっっっ♡♡♡」
「〝ぐっ!!イクっ!!
お前もイクんだっ!!」
「〝は〝いっっっ!!!〝イキ〝ますっっっ〝イグっ♡♡♡〝あ〝あ〝あ〝イグッ♡♡♡」
「〝イグ〝イグ〝イグっ♡〝イッグっ♡〝イグっっっっっ♡♡♡〝イグっっっっっ♡♡♡♡」

「〝あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟っっっ!!!〝イっっっっグうううっっっっっ〜〜♡♡♡♡♡」
「ぐぅ…っ!!」
「〝あっっっっっ♡♡♡はっっっ〟あ〟あ〟あ〟っっっがっ〟あっっっっっ♡♡♡」
「っっっ〟あはっ♡〟んはっ♡〟あっっっ〟あっはっっっ♡♡♡」
「〝あっ〟あっ〟あっ〟あっ!!!〟んんんんんっ♡♡♡〟あはぁ♡〟んっっっっ♡♡♡」

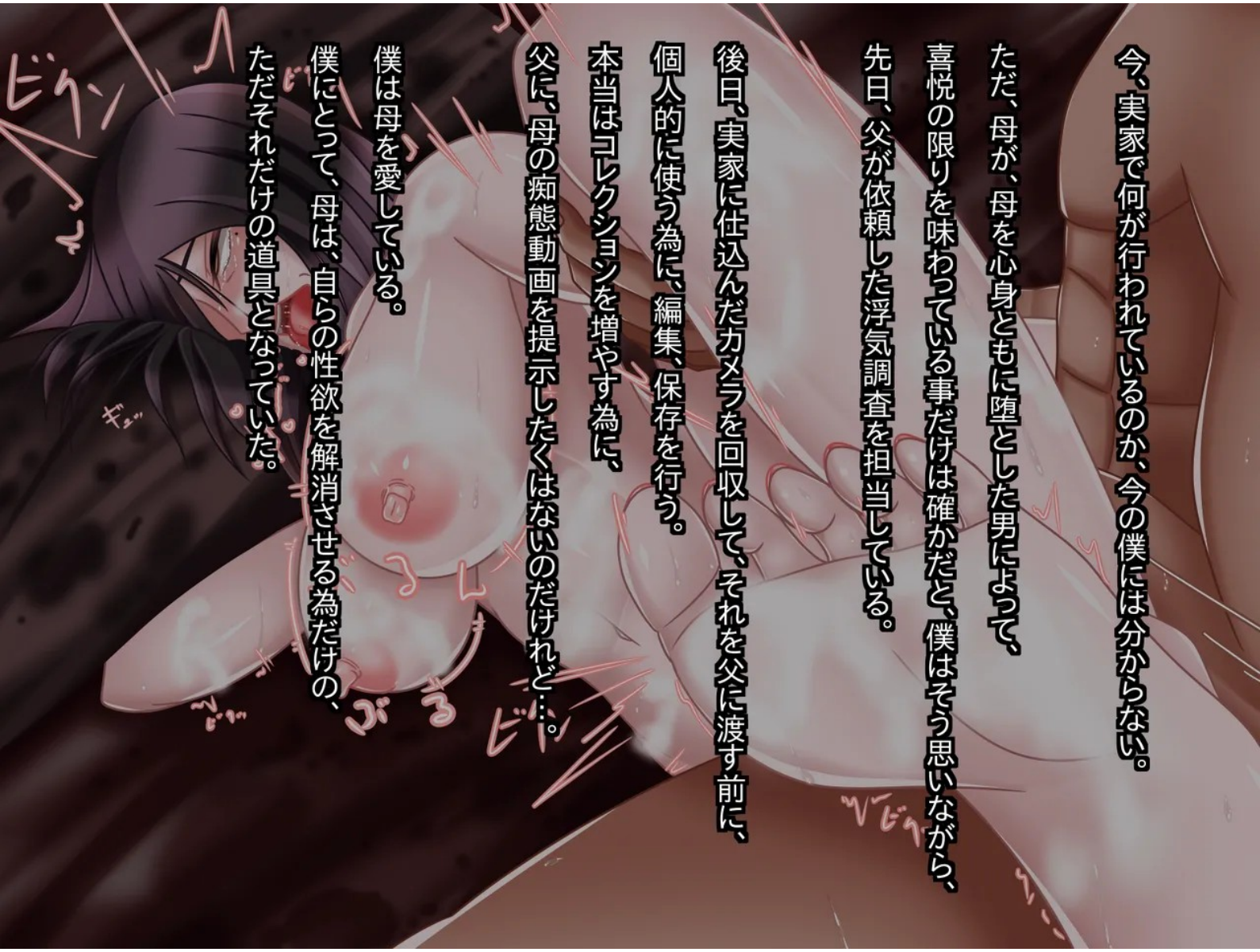
母は絶頂を迎える度に、
全身でそれを表すかの様に、強く跳ねようとするも、
自分を犯している男のペニスによって、一点だけ抑え込まれていた。
その事がより強く、母を昂らせていた。
映像がフェードアウトしていく中で、最後に映った母は、
化粧で隠していた、目元のシワが露わになるほど
弛み、乱れ、蕩けきった、至上の悦びに浸った顔をしていた。

【第五章】

現在、父はまた単身赴任で、家を空けている。
僕は母に、活動場所を与えたい為に、一人暮らしをしている。

通勤途中で実家の前を通るが、一台の見慣れた車が
近くの駐車場に、何日かに渡って駐車している事がある。
あの男の車だ。

今回は五日前から駐車し続けている。


今、実家で何が行われているのか、今の僕には分からない。
ただ、母が、母を心身ともに堕とした男によって、
喜悦の限りを味わっている事だけは確かだと、僕はそう思いながら、
先日、父が依頼した浮気調査を担当している。
後日、実家に仕込んだカメラを回収して、それを父に渡す前に、
個人的に使う為に、編集、保存を行う。
本当はコレクションを増やす為に、
父に、母の痴態動画を提示したくはないのだけれど…。
僕は母を愛している。
僕にとって、母は、自らの性欲を解消させる為だけの、
ただそれだけの道具となっていた。
ビクン
ビン
ぶる
ギュッ

ビクン
ビクン
ギュッ
ぶるん
ぶるる
ビクン